



「社会経営ジャーナル」論文

論題=Title	たたら製鉄の神－金屋子神の信仰－
著者=Author	小林 公子
雑誌名=Citation	社会経営ジャーナル,2015, Vol.3, p.35-40
発行者 = Publisher	放送大学社会経営研究編集委員会
ISSN	2188-1073
巻 = Vol.	3
ページ = pages	35-40
発行年=Issue Year	2015
URL	<a href="http://u-air.net/SGJ/pub/20151101J-Kobayashi.pdf">http://u-air.net/SGJ/pub/20151101J-Kobayashi.pdf</a>

## たたら製鉄の神

—金屋子神の信仰—

小林 公子

### 1. はじめに

数年も前になるが、千葉にある製鉄会社の工場見学の機会に恵まれた。製鉄工場といえば、まず高炉という印象をもっていたが、その工場では火の消えた高炉が数基、昔の面影をとどめているに過ぎなかった。

現在の鉄は、どのようにして生産されているのか、現場に入る前に万が一に備えてと渡されたヘルメットと軍手に、やはり危険があるのかなあとの緊張感も覚えた。やがて開始の合図のベルと同時に目の前に現出したのは、真っ赤に焼けた鉄が、定められたレールの上をベルトのごとく駆け抜ける姿であった。「あーっ」という歓声が起こり、そして暫く沈黙が続いた。最新の方法で生み出された鉄は、想像を遙かに超え、神秘性をも秘めた美しい姿で現出し、それに人々が驚嘆したのである。後で知ったのだが、それは溶鉱炉から出てきた鉄を薄く圧

延したものであった。勿論、現在、これらの作業は一貫してコンピューターの人工知能プログラムによって制御がなされているのである。

我が国では古来から鉄は生産されていたようだが、しかし、縄文末の遺跡から鉄器の出土がみられるが、これらは大陸からの舶載品の可能性が強いという。『魏書東夷伝』の弁辰条には「国、鉄を出し、韓わい倭皆従て之を取る」と記される。国産の鉄器の製作は弥生中期頃からと推定され、3世紀から6世紀にかけて建設された巨大な前方後円墳の建設には、鉄器が使用されたとの推定がなされている。『日本書紀』天智天皇9年(670)の条には「この歳、水碓を造りて鉄を冶す」とあり、この時代には鉄が造られていたことは明らかである。

出雲地方においても『出雲風土記』の飯石郡の条に「波多小川。源は郡家の西南24里なる志許斐山より出て、北に流れて須佐川に入る。鉄あり」「飯石小川。源は郡家の正東12里なる佐久礼山より出て、北の流れて三屋川に入る。鉄あり」などの記事が見られ、風土記の成立は、巻末記の「天平5年(712)2月30日 勘造」から、8世紀初頭には、かなりの鉄が生産されていたと思われる。

以後、鉄は国家の発展、人々の生活に大きな利便を与え、文化の発展に寄与してきた。そして人々は鉄の神秘性と大きな利益の享受を求め、神に祈り、原料鉱の採取・生産・加工といった諸段階に応じて、様々な信仰が行われるようになった。今回は、近世、奥出雲地方を中心に、主として中国山地に広く生産を展開した、たたら製鉄における

金屋子神とその信仰について述べてみたい。

まず、たたら製鉄法はどのような製鉄法であろうか。

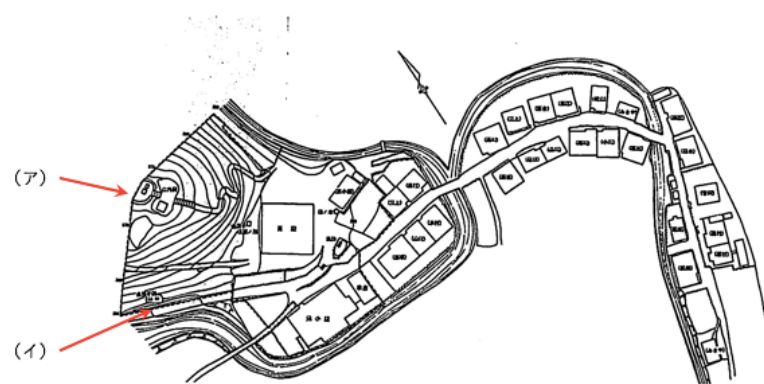
## 2. たたら製鉄

たたらとは、元来は炉の中に風を送る装置、鞴(ふいご)の意味であったようだが、粘土で築いた炉の中で原料の砂鉄と木炭を燃焼させ、砂鉄を3~4日間かけて溶し鉄を選別する方法である。初期には「野たたら」という簡単な土炉で鉄吹きを行い、移動性の多いもので、燃料に用いる木炭も自前で山林から木を切り、炭を焼くという生産一貫方式をとるものであった。こうした簡単な土炉が近隣諸国や中国地方一帯に伝播し、やがて大仕掛けな半永久的な炉が築かれるようになる。16世紀には武器などの需要が増大し、播磨国失踪郡千種村や石見国宍粟郡出羽村などで、鋼の製造法の改良が行われるなど、製鉄方法や諸設備の改善が盛んになされた。

たたら製鉄の画期は、元禄4年(1687)に「天秤鞴」という新しい送風装置が発明されたことによる。送風労力の減少に成功し、急激に生産量を増した。これ以後、たたら製鉄業は益々発展し、大きな資本を持った鉄山師が各地に生まれ、著しい隆盛がみられるようになった。

現在も、たたら製鉄の現況をとどめている施設が菅谷鑪である。島根県飯石郡吉田村(現在は雲南市吉田町)にあり、昭和42(1967)

年に国の重要民俗文化財に指定されている。開設年代は天和元(1681)年と言われるが確証はない。経営者は田部家、約5000平方メートルの一带を山内と称し、明治18(1885)年には、戸数34戸、158人が住み、その中で鉄生産に52人が従事していた。これらの人たちが山林からの木材の伐採、炭焼き、砂鉄の採取、高殿における鉄の生産というような一貫作業に従事していたのであった。(第一図 菅谷鑪の山内図)大正12(1923)年7月に閉山されるが、操業時の山内の姿がそのまま残されている。



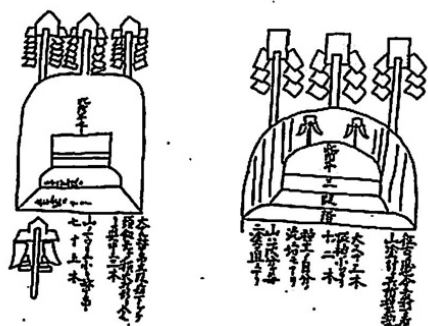
第一図 菅谷鑪の山内図 《『菅谷鑪』の菅谷鑪山内実測図より》

図では、一見平地のようにしか見えないが、図の左側、山内祠(第一図の(ア))のある周辺が最も高く、鉄の生産が行われた高殿の前から山内の家々が見下ろせ、道に沿って順々に低くなり、一带は、盆

地のような地形である。

山内祠には、牛頭天王の小祠と愛宕・秋葉・金比羅の三神を合祀した二基の小祠がある。高殿の前には金屋子神が降臨したと伝えられる桂の木、裏には金屋子神が化粧をしたとする「金屋子化粧の池」が残されている。高殿の近くにある元小屋は、山内全体を支配する施設である。

高殿に祀られている金屋子神については、天明4（1784）年に下原重中が記した『鉄山秘書』の「金屋子神祭ヤウノ事」の条に「高殿ノ内元山押立ノ後ノ隅ニ、少シ高く段ヲ構ヘテ、上ニテ屋根ヲシツラヒ宝殿ノ如、往昔ノ風如左ノ図ニ顕ス也、是ヲ金屋子ノ御山ト号ス」と記しており、図（第二図 金屋子神図『鉄山秘書』より）のごとく描かれ、当時から炉のそばに金屋子神が祀られていた様子が知られる。



第二図 『鉄山秘書』が描く金屋子神の神体

これ以外にも山内の者たちが参詣する金屋子神の祠が山内の入り口に存在する。（第一図（イ））村下はコモリの朝には、必ずこの祠に参拝し高殿に入ったと伝えられている。

たたら生産は、鉄の一生産過程を一代（ひとよ）と呼び、三昼夜ないし四昼夜かかった。その長を村下（むらげ）、補助者が炭坂（すみさか）と呼ぶ。他に炭焚き1人、小廻り2名、合計5名で、一代の任に当たった。天秤鞆の時代には、ほかに番子2名ずつが交代で天秤を踏んでいた。小鉄と炭を数分おきに炉に投入し、炉の具合の調節を行い、時々鉄滓（のろ）を出すといった作業を夜通し続けるもので、かなりの重労働で、とくに村下は生産のすべてを任せられ責任は重大であった。最初の一昼夜をコモリ、次の一昼夜をナカビ、その次の一昼夜をクダリという。四日目の朝を大クダリ、いよいよ釜を壊し、中の鋸（けら）を取り出すのである。真っ赤に燃えた鋸、それは私が千葉の工場で見た鉄の赤いベルトを想像する。その鋸の量と出来が一代の成果なのである。こうして、たたら鉄は生み出されていた。

### 3. 金屋子神と金屋子神社

金屋子神を描いた図は多く残されているが、狐に乗った女神の姿が多い。しかし男神の図も存在し、男女の両説があり不明である。また、神の性格についても八幡神説、天日槍（あめひぼこ）説、素戔鳴尊

説など多くの説がある。金山彦命、金山媛命は金銀銅鉄を通じての鉦山神で、鍛冶神は天目一箇神であるという説、金屋子神は、一神で鉦山と鍛冶の双者の守護神との説なども存在する。金屋子神には種々の説があり、不明な点が多い神である。

このような金屋子神であるが、その信仰の中心として島根県能義郡広瀬町西比田（現在は安来市広瀬町）に金屋子神社が鎮座している。この社の主祭神は、金山彦命、金山媛命で、素戔鳴尊、天照大神などは多くの配祀神が存在する。御神徳は、鉄鋼業・金属商の祖神。鉦山業の祖神。金運の祖神。瓦斯・印刷業の神。土建・石工・左官業の神。家内安全の神とされている。（神社の縁起より）

古来から、たたら製鉄の守護神として製鉄関係者をはじめ鍛冶、鋳物師などの崇敬を受け、その信仰圏は出雲・石見・伯耆・安芸など中国地方全般に及んでいる。同社には、寛政3（1791）年、文化4（1807）年、文政2（1819）の勸進帳が残されており、製鉄業に関連する多くの人たちの寄進は、鉄を生み出すために、いかに金屋子神の力を必要としたか、その信仰の厚さを物語っている。社の勸請年代は不明であるが、領有者であった尼子経久の文明18（1486）年の寄進状が残され、戦国期には建立されていたことは確かである。

同社の縁起として最も古いものは、下原重仲は『鉄山秘書』で、冒頭に「金屋子祭文・雲州非田ノ伝」が記されるが、この祭文は金屋子神社の社司が代々伝え、種々の祭儀に使用されたものという。この書

が出される以前から金屋子信仰が行われ、祭文の作成も室町時代末頃と推定される。それは、生産炉が固定され、多くの鉄山師が誕生し、たたら製鉄を盛んに行われ始めた時期に相当し、生産と信仰が連動して行われていった姿などがうかがえる。

『鉄山秘書』には、「多々良入道」「鑪の宝祭ノ神」「鑪祝ノ餅ノ次第」「犬ヲ忌ム穢事」「金屋子神御神体」「血ノ穢事」「金屋子神祭」など金屋子信仰に絡む事柄を多く記され、特殊な神の祀り方や禁忌は、生産過程において生じたものが多く、それらを伴いつつ信仰が形成され発展していった様子を想像しうる。

#### 4. 金屋子信仰と禁忌

金屋子信仰の特色として禁忌が多いことがあげられる。「鑪での禁忌は、女を嫌い、鑪内にはオナリを除き女性は入れなかった。また、血の忌を非常に嫌い、月々の役には主人の村下も鑪に出ず、あるいは鑪に泊まり、家に帰らなかった。産の時も、生児が男子なら三日、女子なら七日たたら場へ出なかった。それに比し、死の忌は平気であった」とは、ある村下の言葉であるが、鉄が湧かないと、死体をたたら場へ吊すことなどもあったようだ。血を極端に嫌う一方、死は厭わず、むしろ歓迎したらしい。ほかにも金屋子神は動物では犬を嫌い、植物では蔦と麻が禁忌とされるなど、数多くの禁忌が存在した。





る。あの真っ赤な鉄と苦闘し信仰に救いの道を求めた人々、金屋子信仰は、そうした人類の苦闘の歴史の中に展開し、その発展に大きな力を与えるものであった。

私が製鉄工場で見た真っ赤な鉄のベルトにも、先人たちの苦闘の歴史が刻まれていたのである。新しい航空機部品への道も、こうした苦闘の歴史の連続から生まれようとしている。成功を祈りたい。

#### 参考文献

安部正哉『金屋子縁起と炎の伝承』-玉鋼の杜、金屋子神社、1985

石塚尊俊『鑑と剝舟』慶友社、1996

小林公子『生業信仰の形成と展開』大河書房 2010

三枝博音『日本科学古典全書』第十卷、朝日新聞社、1944

佐々木稔『鉄の時代史』雄山閣、2008

島根県文化財愛護協会『菅谷鑑』島根県教育委員会 1968

新日本製鐵株式会社『鉄と日本人』同社 1981

館充『鉄山必用記事』丸善株式会社 2001

鉄の道文化圏推進協議会編『金屋子神信仰の基礎的研究』岩田書院  
2004

渡辺ともみ『たたら製鉄の研究史』吉川弘文館 2006